AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

旭川医科大学研究フォーラム (2016.3) 16:77-79.

旭川医科大学におけるアートインホスピタルの試み

服部ユカリ, 菊地まり子, 上田順子, 守屋潔, 大坪智美

旭川医科大学研究フォーラム 16　：77 ～ 79，2015

依 頼 稿（報告）

旭川医科大学におけるアートインホスピタルの試み

服　部　ユカリ*　　菊　地　まり子*　　上　田　順　子**
守　屋　　潔***　大　坪　智　美****

病院環境にアートを取り入れる「アートインホスピタル」は、UNESCOプロジェクト・世界10年『Arts in Hospital』をきっかけとして、1990年代頃からスウェーデンなどヨーロッパやアメリカを中心に世界中に広がっている。日本では、1995年に亀田総合病院がそのコンセプトを取り入れた病院設計[1]で注目された。また、銅版画家の山本容子氏が、殺風景な病室での父親の看取りをきっかけに、病院の天井に絵を描く試みを2005年に中部ろうさい病院で始め、その後も和歌山県立医科大学付属病院母子医療センターや高松赤十字病院の壁画などを描き、患者さんが自分の病室に掛ける絵を選ぶ「テイクアート」のための作品提供などの活動も行っている。その他にも、東京都済生会中央病院での「環境面でのホスピタリティを高めるために」病院所蔵の芸術作品を展示するプロジェクトや、西脇市立西脇病院での写真展の企画、筑波大学のプロジェクトなど多くの病院や機関がアートを病院の中に取り入れている[2]。

また、病院環境にアートを取り入れるだけでなく、医療に積極的にアートを介在させて癒しや安らぎをもたらし、自然治癒力・回復力を高める活動も、欧米を中心に世界各地で行われている。日本でも、アートインホスピタルの理念に基づいた阪南病院の庭園療法[3]や、神戸の震災被災者をきっかけとした北村らのフィーリングアーツ活動[4]、森林療法と同様の体験を病院の屋上庭園で試みたもの[5]などアートを介在させた様々な療法がある。

アートがもたらす効果に関する研究も進んでおり、不安・ストレスを軽減し、うつ状態を緩和させる、鎮痛剤などの薬物の投与量を減少させる、入院期間を短縮する、患者と医療者のコミュニケーションを促進するなどの報告が多くある。

日本でも、ニューヨーク近代美術館が開発したアート鑑賞プログラムが高齢者の鬱状態の改善や認知症患者の記憶の再生に効果があるという報告がある。

本学の大学病院でも、2階から3階へのエスカレーター横の壁に楽しい絵が描かれており、食堂へ続く廊下にも同じ作者による絵が飾られている。私たちは、これらの取り組みを参考に、高齢者や患者にアートに触れてもらうことにより、楽しい時間を過ごしポジティブな感情体験をする機会を提供したいと考え、写真家が自らの芸術的風景写真を語りと共にスライドショーで示す試みを行った。提示される写真は、単に風景を撮影したのもではなく、国内外の写真展への出品や個展開催の実績があり、写真集も出版しているプロフェッショナルの写真家が撮影したアートであることが重要である。協力していただいたのは、アートインホスピタルに関心が深い、美瑛在住の写真家中西敏貴氏である。中西氏は、NPO法人「北海道を発信する写真家ネットワーク」会員「JNP日本風景写真協会」会員でフォトオフィス「アトリエnipek」カフェ&ギャラリーを主宰し、各種メディアへの作品提供や執筆活動のかたわら、個人・団体の撮影講師としても活動中である[6]。中西氏には、平成25年度・26年度に筆者らが旭川市と共同開催した介護予防教室「脳と体のはつらつ教室」[7]で「写真を楽しむ暮らし」というテーマで、日常の風景を写真で撮ることの楽しさと撮影方法について自身の作品の紹介も交えて講義をしていただいていた。

旭川医科大学　*医学部看護学科　**旭川医科大学病院看護部　***遠隔医療センター　****非常勤講師

図１　「脳と体のいきいき教室」での様子

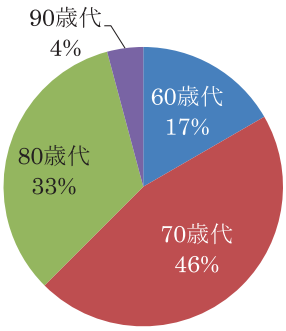

図２　「脳と体のいきいき教室」での参加者の年齢構成

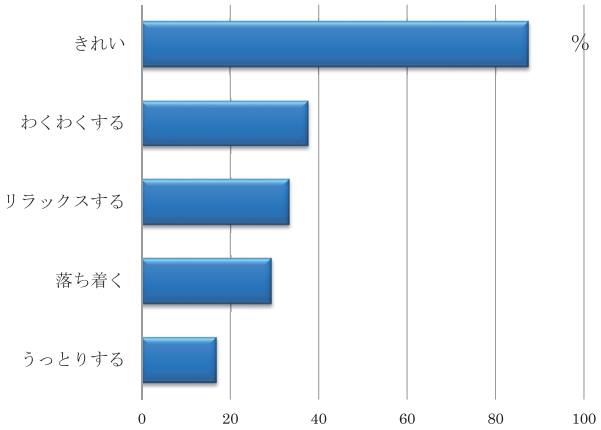

図３　「脳と体のいきいき教室」での参加者の印象

今回は、平成 27 年 8 月 5 日に、筆者らが担当している本学主催の認知機能向上教室「脳と体のいきいき教室」の中で中西氏に、自身の作品を語りと共にスライドショーで約 40 分紹介してもらった（**図１**）。参加者は熱心に鑑賞しており、ユーモアを交えた語りを聞き、時折笑い声も漏れ、終了後はいくつかの質問も出るなど、満足している様子がうかがえた。参加者は24人で、年齢は 60 歳代から 90 歳代であり、70 歳代・80 歳代が 8 割であった（**図２**）。印象を複数回答の選択肢で尋ねたところ、「きれい」21 人（87.5%）、「わくわくする」9 人（16.7%）、「リラックスする」8 人

図４　「写真家中西敏貴光の風景」ポスター

図５　「写真家中西敏貴光の風景」の様子

(33.3%)、「落ち着く」7 人（29.2%）、「うっとりする」4 人（16.7%）とすべて肯定的印象であり（**図３**）、「イライラする」「不安になる」などのネガティブな印象は選択されなかった。

また、11 月 26 日に旭川医科大学病院主催で「入院されている方、通院されている方ひととき日常を離れて“アート”にふれてみませんか？」（**図４**）と呼びかけ、中西氏自身の語りで風景写真作品をスライドショーで紹介する「写真家中西敏貴光の風景」と題した催しが開催された（**図５**）。参加者は、入院患者さんなど 20 名前後で、中には持続点滴中の方、酸素吸入中の方、車椅子使用の方や、病棟の看護師が付き添って来てくださった方もあった。参加者の中からは、「それはどこですか？」と撮影場所を尋ねる質問や、「きれいだねー」という声があがるなど、和やかな雰囲気であった。アンケートに協力していただいた 13 名は、男性 3 人（23.1%）、女性 10 人（76.9%）で、年齢は 20 歳代から 80 歳代であった（**図６**）。内容について「期

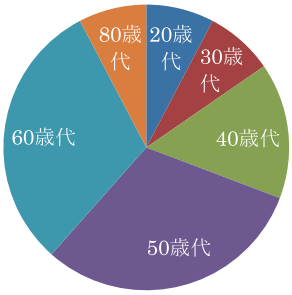

図 6　「写真家中西敏貴　光の風景」回答者の年齢構成

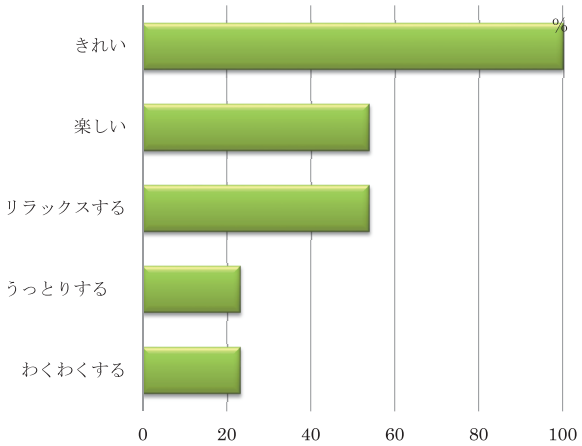

図 7　「写真家中西敏貴　光の風景」の印象

待以上だった」10 名（76.9%）、「期待どおりだった」3 名（23.1%）と高い評価であり、今後もこのような催しがあれば見たいかとの問には、無回答 1 名を除く 12 名全員が「再度見たい」と答えた。印象について複数回答の選択肢で尋ねたところ、「きれい」13 人（100%）、「リラックスする」と「楽しい」が共に 7 人（53.8%）、「うっとりする」と「わくわくする」が共に 3 人（23.1%）とすべて肯定的印象であり（**図 7**）、「イライラする」「不安になる」などのネガティブな印象は全く選択されなかった。

持続点滴・酸素吸入を受けて車椅子で参加されていた高齢の患者さんが、ダイヤモンドダストが虹色に写っている 1 コマを見て、それまでややけだるそうな気配だったのに突然、「これは何？花？」と尋ねられた。ダイヤモンドダストだと知ると、「きれいだねー、こんなのは初めて見た。」と大きく目を開けてはっきりと言われたのが非常に印象的であった。

入院中の患者や家族は、痛み、悲しみ、不安、心配、苦しみを感じることが多く、また不自由さや不便さを日々体験している。そのような日常でたとえひとときでも、美しいものを見て、楽しい、わくわくするなどポジティブな気持ちになる機会があることは、少しでも患者さんに力をもたらすことになると思われる。

また、このような機会は、緊張が高く責任感が重く多忙な仕事をしている病院職員にも癒しと活力をもたらすといわれている。平成 28 年 2 月には、大学病院の看護部主催で看護師長研修「看護マネジメントリフレクション～今、あらためて光の風景から看護の本質を探る」として中西さんの講演とグループワークが、行われた。写真家と看護職と分野は異なってもプロフェッショナルとしての仕事の共通点があることや新たな物事のとらえ方の発見など多くの成果が得られた。今後も本学で多くの賛同者を得て、アートインホスピタルの活動が発展することを望みたい。

【引用文献】

1）亀田総合病院：アートインホスピタルのメリットは何ですか？
http://www.kameda-nurse.jp/faq/index.html

2）こいし歯科：アートインホスピタルとは？
http://www.834814.com/13_info_clinic/

3）医療法人社団杏和会　阪南病院　地域医療連携室＆総務課広報「光・風・緑」チーム（編）：泉ヶ丘グリーンフェスタ 2013、光風緑（2013 年 3 月）、2013.
http://www.hannnan.or.jp

4）北村義博、吉岡隆之：フィーリングアーツとナラティブ、日本保健医療行動科学学会、22、77-91、2007.

5）松永慶子、朴範鎭、宮崎良文：病院屋上森林が要介護女性患者に及ぼす主観的リラックス効果－簡易感情尺度を用いて－、日衛誌、66、657-662、2011.

6）中西敏貴HP：http://www.nipek.net/index.html

7）作並亜紀子、服部ユカリ：認知機能向上教室の効果に関する研究、日本老年看護学会第 18 回学術集会、2015、横浜